教員に求められるもの

積極的な生徒指導

別府市教育委員会　学校教育課
指導主事　藤原　良浩

「生徒指導における児童生徒理解と対応のプロセス」と題しまして、「生徒指導の意義と目的」「児童生徒にどうかかわるか」「これからの生徒指導の方向性」「これからの生徒指導の目指すもの」について、お話をさせていただきました。皆さんのメモを取りながら真剣に講義を聞く姿勢が印象に残っています。

今回、講義の内容を考えたり、実際に皆さんに講義を行ったりする中で、私自身が子どもたちの表面的な理解にとどまり、適切な指導ができず悩んでいたことを思い出しました。私の子どもへの接し方が変化したのは、今までに出会った先生方の指導方法や教育観等から自分なりに接し方を見直し、参考になるところを積極的に取り入れていったからだと思います。講義の中でもお伝えしましたが、学校には様々な先生や職員の方がいらっしゃいます。最初から生徒への指導がうまくいくことはおそらくありません。「同僚性」「協働性」をベースに教職員とつながることで、生徒理解を深めてほしいと思います。

生徒指導には、子どもたちを学校生活全体で成長させるといった視点が大切です。生徒指導の目標は「自己指導能力の育成」と示しました。どのような子どもたちを育てるのか、どのような働きかけであれば望ましい大人へと成長していくのかなどを考えながら、登校時の様子や授業、特別活動の時間など、登校から下校までの１日中「積極的な生徒指導（開発的・予防的な生徒指導）」を心掛けてほしいと思います。「積極的な生徒指導」を進めるには、子どもたちとの適切な関係が必要です。そうした関係づくりのために、話は最後まで聴く、否定しない、相手の関心に関心を持つ、同じ立場で考えるなど、子どもたちに関わり、話をよく聴いてあげてほしいと思います。そして、子どもの背後には保護者がいることを忘れず、保護者との信頼関係づくりを怠らないようにしてほしいと思います。

また、すべての子どもたちが問題行動の要因を抱えている可能性があるという認識を持ってください。問題行動の背景には、家庭や人間関係、本人にまつわる要因など、様々な原因が考えられます。トラブルや困りが発生した場合は、一人で抱え込まずに、協力して組織的に解決していくことが大切です。ケースによっては、外部の相談機関や医療機関と連携することもあるでしょう。様々な視点から解決へと導いていく組織的な対応が、今、学校に求められています。「チーム学校」として、連携による指導・支援を大切にしてほしと思います。

子どもたちとの出会いは、形に残らずとも、かけがえのない宝物として蓄積されていくと思います。今、教育現場には、いじめや不登校、保護者対応等、様々な課題が山積していますが、それらの課題と真摯に向き合い、未来ある子どもたちのために素敵な先生になってください。皆さんの今後のご活躍を期待しています。

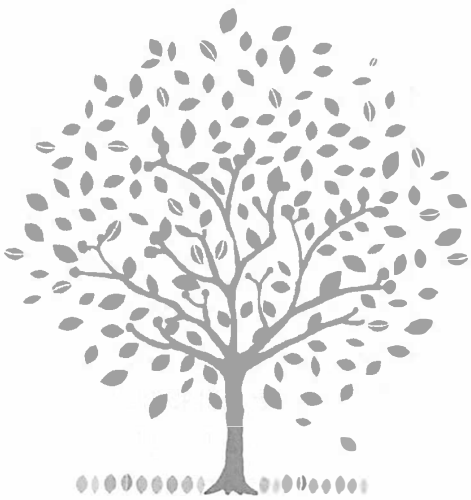
子どもを主語にした学校教育を

別府市教育委員会　学校教育課
指導主事　山田　慈子

「これからの学校教育にあなたはどう関わるか」と題して、学校教育における学習指導についてお話しをさせていただきました。新学習指導要領では、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践が謳われていますが、これから教職に就かれる皆さんにも、周囲の教職員、子ども、保護者、地域の人と対話し、協働しながら、自分ができること、すべきことを見出し、主体的に学校教育に関わっていくことを望んでいます。

現在、世界では、持続可能な包括的な社会を目指し、SDGsの実現に向けた取組が進められています。「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（中教審答申2021.1.26）は、子どもたちの未来社会を、「Society5.0時代」「予測困難な時代」と言っています。急激に変化する時代において生じる様々な課題に対し、多様な人々と協働し知恵を出し合って解決しながら、より豊かな人生を切り拓いていく資質・能力を子どもたちに育んでいくことが求められているのです。

ここ数年の新型コロナウイルス感染症の拡大は、学校教育の在り方に大きな影響を与えています。「対面」だけでなく、必要に応じて「オンライン」を取り入れた授業、タブレット端末を用いて子どもたちの多様な学びを支える授業の実践等、数多くの新たな試みが全国各地でなされています。社会の変化に応じながら、教師自身も自らの資質・能力の向上を図るため研修と実践を積み重ねていく必要があるのです。

講義の中では、単元構想や授業づくりについても触れました。最も大切にしてほしいことは、育てたい子どもの姿をより具体的に描くことです。そうすれば、単元の目標や評価規準を明確にもつことにつながります。また、単元の指導や評価を段階的に計画し、１単位ずつの授業を子どもに身に付けさせたい力を軸にして系統的につなぐことができます。授業づくりをする際には、子どもがどのような反応をするのか想像しながら展開や手立ての工夫をします。そして、授業中は、子どもの学びに目を向け、本時のねらいに到達できているかを見取り、自らの指導の改善を図ります。学校教育の中心には、一人ひとりの子どもの姿があることを心に留めておかなければならないのです。

先述の答申には、目指す教職員の姿として「環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている」「子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている」「子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている」とあります。あなたらしさを表現しながら、教職人生を通してこれらの教師像を実現していってほしいと願っています。